

# 精神一到

令和6年度 朝礼 (2/3) 校長の話

おはようございます。

今日の四字熟語は「精神一到」です。正式には、この言葉の後には「精神一到、何事か成らざらん」という言葉が続きます。つまり、どんなに困難なことも精神を集中して行えば必ず成し遂げられるという意味です。

このことに関連して、今から2種類の虫の話をしたと思います。

一つ目は「ノミ」です。わずか数mmの小さな虫ですが、この虫を机の上に置くと、ピョンピョンと高く跳ね回ります。人間でいえば300m飛べる能力だそうです。

そのノミの上にガラス瓶をかぶせます。すると、ノミは跳ね上がってもガラス瓶にぶつかり再び地面に戻ってしまいます。これを何回も繰り返していると、やがてノミはもう飛ばなくなってしまうそうです。そしてこの後、瓶を取り除きます。しかし、ノミはもう跳ね上がろうとしません。瓶がないにもかかわらず、もう無駄だと思い込んで、二度と跳ねなくなるそうです。

これと対照的な虫がいます。「マルハナバチ」というハチの1種です。このハチは体がずんぐりと大きくて、その背中に生えている羽は薄くてみすぼらしいほど小さな羽です。航空技術者は、「こんな小さな羽なら理論上、飛ぶことができない」と言っているそうです。ところが、マルハナバチは飛べます。花の周りを軽々と飛び回ります。

なぜ飛べるのでしょうか。科学者の間でも謎だそうです。このことについてある文学者は「自分が飛べないことを知らないから、飛べるのだ」といっています。おもしろい言い回しですね。自分はハチだから飛べて当たり前だと思い込んで、飛んでいるというのです。

さて、ノミは本当は飛べるのに、ガラス瓶のせいで限界を知ってしまい、飛べなくなりました。一方、マルハナバチは飛べるはずのない体の構造なのに、なぜか飛んでいます。この話を聞いて、皆さんはどんなことを考えたでしょうか。

この話は、私たちに限界の思い込みについて考えさせられます

始めから無理だろう、そんなことをやっても無駄だと思い込んでいると、本当にそれができなくなる。逆に、疑う余地すらなく絶対にできると思い込んでいれば、現実には私たちの思い通りに起こるのかもしれない。

さて、本日の四字熟語「精神一到」の話に戻ります。この言葉は、昔の中国のあるエピソードから生まれました。昔、中国に弓の名人 李広という人がおりました。ある日、草むらの中に虎を見つけた李広は、得意の弓矢をその虎に放ち、虎に刺さりました。李広はじっと動かない虎の近くに足を運びます。すると、なんとそれは虎ではなく、虎の形に似た大きな岩だったそうです。そして、その岩には彼の放った弓矢が刺さっていました。どんな弓矢の名人でも、普通、岩に矢を刺すことはできません。しかし、虎だと思い込んでいた李広には弓矢を刺すことができたのでした。

「精神一到、何事かならざらん」すなわち、自分の思いが疑いなくただ一筋であればどんなことでも叶うのではないか、李広のエピソードからこの言葉が生まれました

皆さんはこれからさまざまな困難な壁にぶつかると思います。しかし、その壁を見てすぐにもうダメだと限界を決めつけるのはまだ早いのではないのでしょうか。「精神一到」の気持ちを持って成功を信じて疑わず、前向きに進めば、素晴らしい結果が待っていると思います。

3年生はこれから受験を迎えますね。大きな壁を前にして、様々な思いに駆られると思いますが、ぜひ自分を信じて、一途に立ち向かってください。1・2年生の皆さんも自分で自分の限界を設けず、たとえマルハナバチのような小さな羽であっても、空を飛べるということを信じて、努力を続けてみてください。皆さんの成長を信じています。

さて、ここでお話を変えて、来年度の部活動についてお話をします。詳しくは「学校だより」にありますので、それを見てください。

毎年、部活の存続については確定することが非常に難しい状況です。顧問となる先生が配置できない場合、その部は廃部や他校との合同部活、また地域の方の協力を仰ぐなど様々な対応をしなければなりません。そのようなわけで、来年は今ある部活が必ずあると約束できないということを、生徒の皆さんには分かってほしいと思います。

はっきりとした段階でまたお知らせしますので、それまでは今の部活をこれまで同様、一生懸命頑張ってください。

先生の話は以上です。